

AJU はるよ こい

写真は名古屋「障害児・者」生活と教育を考える会の「情報誌」189号の表紙である。毎月、定期的に刊行され、数多くの記憶や情報が記録されている。

今号は「第13回障害児の高校進学を実現する全国交流集会 in あいち」の特集である。4つの分科会報告、本誌編集人であり、集會事務局長として活躍した川本道代さんの「集會のご報告とお礼」、関連記事などが掲載されている。なお、毎日新聞大阪本社版9月23日「障害者 高校入試で定員内不合格」は、集會テーマに関わる特集記事だ。



私も「学びと交流の場」と題して寄稿したので、送付した原稿を添付しておきたい。

「第13回障害児の高校進学を実現する全国交流集会 in あいち」が、刈谷市総合文化センターで9月15～16日に開催された。「いっしょに行こまい！高校も！～様々な「障害」のある子・社会的「排除」にあう子の進学希望をかなえるために」が本集會テーマであり、開催の趣旨である。

1日目の全体会では、寺脇研さんが「私が実現した高校の希望者全入～適格者主義の呪縛を超えて」と題して記念講演した。寺脇さんは文部省在職中、「ゆとり教育」推進に大きな役割を果たし、広島県教育長として出向中に、広島県の県立高校の希望者全入を実現させた。記念講演では、希望者全入の経験をリアルに語った。高校教育無償化などの動きもあり、希望者全入の流れは続いているが、それを邪魔する動きとして「全国学力テスト」を挙げる。適格者主義は、学校が英語・数学といった主要教科を中心に組み立てられていた時代の反映だ。AIが急速に発達し、学校のあり方も変わっていく中で、適格者主義の呪縛からも解き放たれるだろう。

全体会のあと、4つの会場に分かれて分科会が行われた。とくに第4分科会、「障害児だけではない」高校に行けない子どもたちは、本集會のテーマに即して設けられた。寺脇さんも第1分科会に参加して、次のようにコメントした。地域により違いはあるが、「定員内不合格」という現実を前に、障害当事者だけでなく、教員や行政が問題に正面から向き合うこと。障害をもつ子の「学びたい」という意思こそが大切だ。高校の定員割れが問題になっており、そのなかで、なぜ「定員内不合格」という事態が起こるのか。適格者主義の呪縛から抜け出すことが求められる。

分科会のあとの交流会も、障害当事者とその家族・支援者の連携により盛り上がり、全国各地からの参加者の交流の輪が広がった。2日目は分科会の続きから始まる。第1分科会では、沖縄の仲村伊織さんの中学生生活が映像で紹介され、心に迫るものがあった。あとで聞くと、この映像は中学の教員らの協力で作られたという。

分科会のあと再び全体会に。4分科会から手短かに報告があった。分科会は時間が短い

ながらも質問や意見が続いて、各地の情報が交換された。沖縄では、集会後にその成果が報道された。分科会報告は、100 ページの資料集に詳しく掲載されている。最後に、司会を担当した私が集会「まとめ」を述べ、次年度開催の千葉にバトンタッチした。

集会で述べたことを思い出しながら、私なりの感想を記しておこう。北は北海道から南は沖縄まで、全国から 264 名の参加者があり、ともに学び交流できたことを、まずは喜びたい。私は全国集会に初参加であるが、全体会司会の「大役」をつとめた。会場の関係もあり時間が制約されたが、内容の濃い集会だったと思う。

集会テーマ「高校にも一緒に行こう」という切実な願い。今回の全国交流集会からも、展望がすこし開けてきたが、まだ課題が多いことも明らかになった。北海道では「定員内不合格」に関連して住民訴訟も起こされた。希望者の高校全入に向け、適格者主義の呪縛から抜け出すには、全国各地の交流をさらに深めるとともに、各地域で障害当事者と学校、行政との地道な協議、連携が欠かせない。

(2018 年 10 月 25 日)